

まなびと



もくじ

新しい小学校学習指導要領案（社会）－変更の概要－	教育出版編集局	2
観光産業を支える情報のかかわり－函館市立弥生小学校の実践を通して－	寺本 潔	4
実践紹介		
[3年] 集団思考による社会科の資質・能力の育成		
－単元「まち探検」における「比較する力・関連づける力」を例に－	加藤智敏	10
[3年] つなぎ・つながる学びをつくる		
－「なぜ」から「つながる」学びを育てるために－	西 竜王	16
[6年] 子どもどうしの思考を練り上げる場面を考える		
－単元「新しい時代の幕あけ」を例に－	井口幸政	22

新しい小学校学習指導要領案（社会）－変更の概要－

教育出版編集局

文部科学省は2月14日、2020（平成32）年度から完全実施される予定の新しい小学校学習指導要領案を公表しました。同案は1か月間の意見公募手続（パブリックコメント）を経たのち、2016（平成28）年度中に確定、告示される見通しです。

本稿は、小学校学習指導要領案「社会」について、変更の概要をまとめたものです。

年間の授業時数は変わらず

「社会」の年間授業時数は下表のとおり示されていて、現行時数から変更はないものとされています（学校教育法施行規則の改正案に記載）。

第3学年	70時間	第5学年	100時間
第4学年	90時間	第6学年	105時間

育成すべき資質・能力に基づく枠組みの採用

中央教育審議会（中教審）は、育成すべき資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に整理して明確化を図り、それに基づいて新学習指導要領では目標や内容を見直す必要があると述べてきました。

そのことは、公開された「社会」の新指導要領案において、次のようなかたちで具体化されています。

- ・教科と各学年の「目標」として、資質・能力の三つの柱に対応する（1）（2）（3）が示されている。なお、各前文では、「社会的な見方・考え方」を働かせた問題解決的な学習を通して、資質・能力を育成するものとされている。
- ・各学年の「内容」も、ア「知識及び技能」、イ

「思考力、判断力、表現力等」という枠組みで示されている。

1 構成や配列などについて

第3学年と第4学年が分離

構成上の大きな変更として、現行学習指導要領が中学年を「第3学年及び第4学年」として一つのまとまりで示しているのに対して、新指導要領案は第3学年と第4学年を分離させ、別個に示しているのは特筆すべきことといえます。

そのうえで、現行指導要領のもとでは指導計画上、第4学年に位置づけられることの多い「地域社会における災害及び事故の防止」に相当する内容が、新指導要領案では第3学年に置かれています（内容（3）「地域の安全を守る働き」）。

一方、現行指導要領のもとでは指導計画上、第3学年に位置づけられることの多い「文化財や年中行事」に相当する内容は、新指導要領案では第4学年に置かれています（第4学年：内容（4）「県内の伝統や文化、先人の働き」）。

重点を置く取り扱いが示された第3学年

新指導要領案は、第3学年の内容（1）「身近な地域や市区町村の様子」は「自分たちの市に重点を置くよう配慮すること」としています。

また、（3）「地域の安全を守る働き」についても、「火災と事故はいずれも取り上げること」としたうえで、「どちらかに重点を置くなど効果的な指導を工夫すること」と述べています（「内容の取扱い」）。

これらは、第3学年で学習すべき内容が、現状

に比べて増える結果となることを踏まえたものでもあると考えられます。

内容や項目の配列の主な変更

第4学年に関しては、現行指導要領で「県（都、道、府）の様子」として一つのまとまりで示されている内容が、新指導要領案では二つに分割され、「自分たちの県の地理的環境の概要」「47都道府県の名称と位置」は学年の最初に、「県内の特色ある地域の様子」は学年の最後に置かれるという配列の変更がみられます。

第5学年に関しては、現行指導要領で「我が国の国土の自然などの様子」として一つのまとまりで示されている内容が、新指導要領案では二つに分割され、「自然災害」「森林」「公害の防止や生活環境の改善」に関わる内容は学年の最後に置かれるという配列の変更がみられます。

第6学年に関しては、内容や項目の配列に、次のような変更がみられます。

	現行指導要領	新指導要領案
①	歴史上の主な事象	政治の働き
②	政治の働き	歴史上の主な事象
③	世界の中の日本の役割	グローバル化する世界と日本の役割

また、新指導要領案の内容（１）「政治の働き」については、「日本国憲法」が先に、「国や地方公共団体の政治」はあとに置かれており、現行版指導要領とは逆の順序で示されています。

2 大きく変更された内容などについて

第3学年：市の様子の移り変わり〈内容（４）〉

現行指導要領では、古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子、文化財や年中行事について調べることを通して、地域や人々の生活の変化について考えることなどを趣旨とした内容です。新指導要領案では「交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具

などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現すること」とされ、内容が大幅に変更されています。

第4学年：自然災害から人々を守る活動

〈内容（３）〉

地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることなどについて学習する新設の内容として置かれています。

ここでの「関係機関」は、県庁や市役所などの働きを中心に上げることとされています。

第5学年：我が国の産業と情報との関わり

〈内容（４）〉

新指導要領案では、内容の趣旨が「産業と情報との関わり」へと大きく変更されています。（現行指導要領では「情報産業や情報化した社会」）。

「情報産業」として、「放送、新聞などの産業」の中から選択して取り上げることとされている点は変更されていません。情報を生かして発展する産業は、販売、運輸、観光、医療、福祉などに関わる産業の中から選択して取り上げることとされています。

選択・判断、構想

新指導要領案の「内容の取扱い」には、「選択・判断できるよう配慮する」といった現行指導要領にはない記述が各学年に見られます。例えば「節水や節電など自分たちにできることを考えたり選択・判断したりできるよう配慮すること」〈第4学年：内容の取扱い（１）エ〉のように、より具体的に示されている場合もあります。

また、「これからの市の発展について考えることができるよう配慮する」〈第3学年：内容の取扱い（４）ウ〉などの記述も各学年にみられ、いわば地域や社会のこれからについて「構想」することが指導上の配慮すべき事柄とされています。

観光産業を支える情報のかかわり

はこだて やよい
—函館市立弥生小学校の実践を通して—

王川大学 寺本 潔

地域ブランド力、全国No.1の自治体

2016年10月に発表された「地域ブランド調査」(株・ブランド総合研究所)で、「魅力的な市区町村」として、北海道函館市が3年連続第1位に選ばれた。函館市は、自然・食・街並み(歴史)の三拍子そろった多彩な観光都市である。鎖国から開国した幕末の日本にとって、北の玄関口であった。ペリーの上陸地点や函館山、擬洋風建築の街並みやレトロな金森赤レンガ倉庫(写真1)、最後の侍とも言える新選組の土方歳三が戦った五稜郭、そして朝市などで味わう豊かな海鮮食材が魅力である。また、市内の坂道から眺める港、函館山(標高334m)からの夜景、街のイルミネーションなどの景観と相まって宝箱のようなきらめきに富み、北海道新幹線の新函館北斗駅開業の追い風を受けて、多くの観光客が押し寄せている。函館市の統計によると、2016年度上半期(4月～9月)は前年比14.1%増の366万5千人の観光客が来訪している。



▲写真1. 函館山と金森赤レンガ倉庫

この地に生まれ育つ児童にとって、この数字は誇らしいことであろう。しかし、「どうしても皆さんの観光客が函館市にやってくるのか、説明して下さい。」と問うと、紋切り型の回答しか返ってこない。地元の児童だからといって、観光客の立場で函館市の魅力を十分に理解できているか、客層に応じた観光のニーズが類推できるか、観光産業の具体的な仕事を知っているか、観光情報と観光産業の関係をつかんでいるかを問われたら、答えに窮するにちがいない。

現行の小学校学習指導要領内容で、「情報」単元は5年生に配置されている。このたび、筆者は函館市立弥生小学校(児童数188人、2016年)において、「産業を支える情報のかかわり」を視点に出前授業を展開した。出前授業を快く引き受けていただいた沢田慶一校長、林聖先生のお二方に心よりお礼申し上げたい。

2 出前授業の指導計画

立案した学習内容は次の通りである。第1時は、函館や道南地域をめぐるおススメ観光プログラムを、筆者が考案した「観光地+動詞」のフレーズでつくるワークショップ。第2時は、地元の観光パンフレット『函館旅時間』の読解。第3時はタブレットを使い、北海道庁と函館国際観光コンベンション協会や金森赤レンガ倉庫のウェブサイトを開覧した。ウェブサイトにはどのような観光情報が掲載されているか、障がい者や乳幼児連れのお客さんへの対応、冬季の履物などへの注意、観光客の立場に立った情報などを確認させた(写真2

～4)。第4時は、客層に応じた旅行のタイプ分けを二軸シート（図1）を使って思考させた。第5・6時は、各自がB5サイズの白紙に観光客誘致のポスターを作成し、それらを貼り合わせてまとめる展開とした（写真5～7）。

3 出前授業の概要

【第1時】北海道や函館市が人気No.1である事実から、その理由を考え、道南観光プランを地図帳を使って立案できる。

	学習活動	指導上の留意点
導入	1. 47都道府県の中で人気の都道府県と都市はどこかを予想する。約1,000ある全国の市区の中で、最も人気の高い街が函館市であることを知り、その理由を考える。 ・新幹線が表紙を飾っている。 ・おいしそうな海産物の写真が目だつ。 ・函館はやはり夜景かな。 ・レトロな建物もあるよ。	・予想した都道府県名を出した後、意見の根拠となる自分の考えを引き出す。 ・1位である理由を列記する。 ・歴史、食、夜景が函館市のいちばんの魅力である事実を確認する。 ・観光6分類（自然、食、生活文化、歴史、施設、イベント）の枠と、各グループから出された意見を教師がおおまかに整理・板書する。
展開	2. 地図帳を使って北海道地方南部を参照し、東京から訪れた観光客の立場から楽しみ方を考える。「観光地+動詞」の組み合わせで、ノートに各自1つ書き出す。	・北海道にある主な観光地名を列記する。 ・隣の人と話し合いながら探してもよい。 ・友だちのアイデアを喜んで聞くためにも、相づちと感嘆の声をあげるように勧める。
まとめ	3. 各班の代表者に、班内で最もよいと考える「観光地+動詞」案を黒板に書き出す。 4. 皆で考えたアイデアの感想を述べ合う。	・楽しく話し合いながら決めていく。

【第2時】観光パンフレットの読み取りを通して函館市の観光の魅力に気づき、観光客の立場に

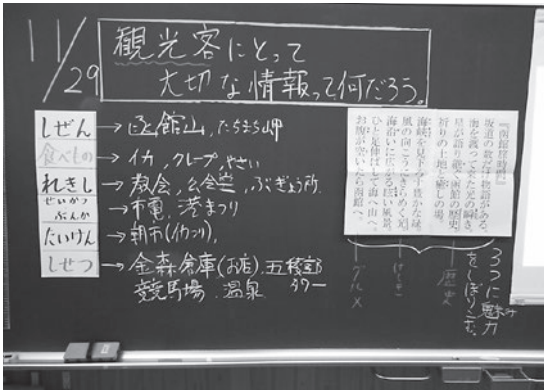
立った情報がどのように編集されているかを考え、よりよい情報の出し方をくふうしようとする。

	学習活動	指導上の留意点
導入	1. パンフレット『函館旅時間』を調べ、函館市の魅力がエリア別にテーマを決めて伝えられていることを理解する。 ・表紙の写真はどこか。 ・キャッチフレーズはどうか。 ・情報は何か。	・観光地のエリア別に魅力が特色づけられていることを知るために、パンフレットに書かれたキャッチフレーズの一覧（「坂道の数だけ物語がある。」「海を渡って来た光の瞬き。」「星が語り継ぐ函館の歴史。」「祈りの土地と癒しの場。」「海峡を見下ろす豊かな緑。」「風

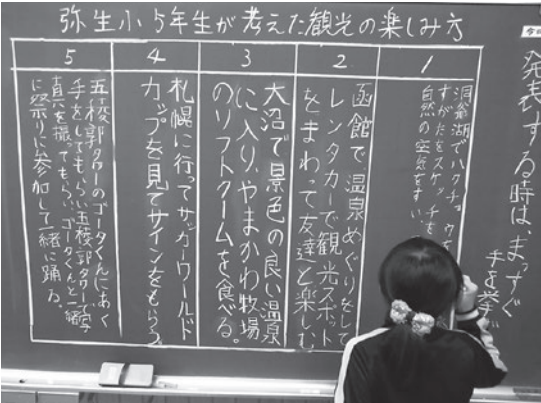
展開	2. 「歴史、景観、食」に焦点化し、交通や地図、イベントの各情報からパンフレットが編集されていることを見出す。	の向こうにきらめく光。」「海沿いに広がる眩い風景。」「ひと足伸ばして海へ山へ。」「お腹が空いたら函館へ。）」を貼り出す。
まとめ	3. 地図情報や散歩コース、イベント情報、問い合わせ先の電話番号など、観光客に必要な情報がコンパクトに盛り込まれていることを知る。	・「あなたの“あの頃”に出会う街」というキャッチフレーズの意味を軸に、函館の魅力が街の歴史物語にあることを焦点化する。 ・追加の情報として、冬季の観光客は着用の靴に注意するべき、ということに掲載した方がいいのではないかと補足する。

【第3時】授業の概要：タブレットを使い、観光情報の検索を行った。ICT教育の研究大会を開催した小学校であったため、児童一人1台のタブレットが使える環境にあったことも幸いした。さまざまな観光情報を検索し、観光客の立場に立った情報のつくり方を調べることができた。

【第4時】授業の概要：図1に示したように、客層に応じた観光のタイプ分けについてグループで考えさせた。意外にも、各客層の特性について



▲写真3. 『函館旅時間』が描く観光地の魅力を整理した板書

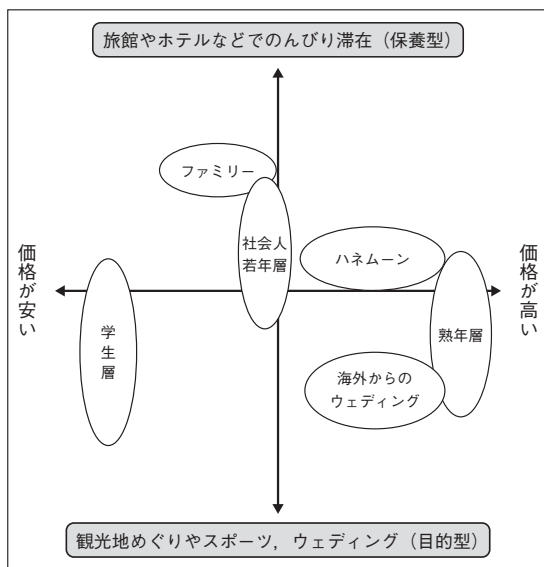


▲写真2. 「観光地+動詞」の組み合わせで考えた道南観光プログラム



▲写真4. タブレットを使い各種観光情報のつくり方を調べ合う

北海道を訪れた6種の客層がどの位置にあるかを考える



▲図1. 6種の客層に応じた観光のタイプ分けで使った二軸シート

注) 上図は、森下晶美編著(2016)『新版 観光マーケティング入門』同友館、232ページを参考に寺本が作図した。授業の実際には、客層を表したイラストカードを用意し、二軸のみを示したシートにカードを配置させる。

5年生なりに理解できていたのが興味深かった。例えば、「熟年層は校長先生くらいのお年寄りだから、きっとのんびり旅をしたいのだと思う」、「学生はアルバイトで貯めたお金で旅行をしているから、価格が安い方がいい」、「海外から来たハネムーン客は、お金を持っているから価格が



▲写真6. 6種の客層を描いた絵カードを班で議論しながら二軸シートに配置する



▲写真5. 客層に応じた観光のタイプ分けを考え合う



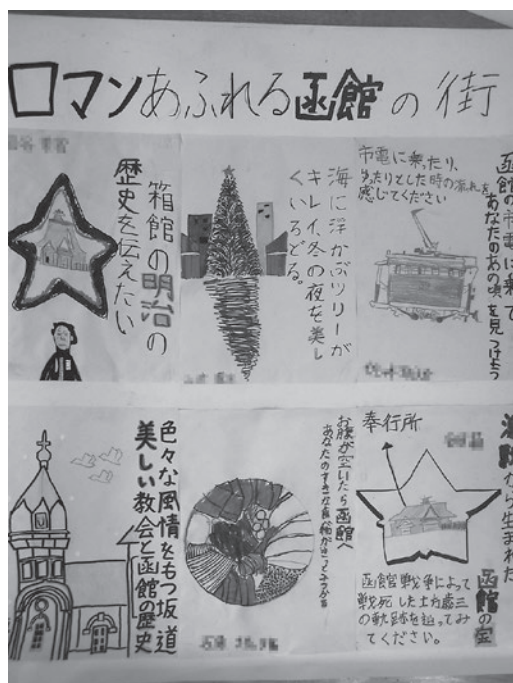
▲写真7. 寺本が持ち込んだ北海道旅行パンフレット貼り合せボード

高いぜいたくな旅をするのでは」などと、類推が的確であった。主体的・対話的で、観光客の立場で考えるという「深い学び」がある程度実現できた。

【第5・6時】授業の概要：各児童に1枚の、函館市に観光客を呼び込むための絵入りメッセージを描かせた。絵だけでなく、くふうされた観光キャッチフレーズも相まって、素敵な作品ができた（写真8）。

4 産業を支える情報のとらえ方

現行の「情報」単元では、放送局や新聞社の役割、情報による暮らしの向上を扱っている。本授業ではアングルを変えて、産業を支えるという視点から地元の観光情報を多角的にとらえさせ、情報化の進展にともなう産業の発展や国民生活の向上について自分の考えを持つように促した。インターネット通信販売や広域医療サービスなども扱えるが、筆者は「観光」こそ児童の興味・関心を引きつける題材になると考えている。「観光」を取り上げることで販売業や運輸業も関連づけて扱うことができ、なによりも児童自身の観光体験をもとに、身近なものとしてとらえられる。いまや、各都道府県の観光部局やコンベンションビューロー、民間の旅行会社、出版社、地元の観光系サイトなどから多くの情報が発信されている。これらの情報を活用することで各種の産業が発展しているすがたを、児童にもっと気づかせたい。農産品を紹介する情報サイトやパンフレットを分析させたり、観光列車や沿線イベントの情報を扱いな



▲写真8. 各自でまとめた「ようこそ函館へ」のPR貼り合せポスター

がら、販売業・運輸業の役割に気づかせたりする学びが想定できる。「情報」単元の学習活動がこれまで以上にもおもしろくなるだろう。

5 観光地に立地する学校の特色を生かそう

全国各地でこのような授業が成功するとは考えにくい。観光地のある自治体に立地する学校でこそ、効果的だからである。函館市と同じ北海道では、札幌市や富良野市、小樽市でぜひ取り組んでほしい。東京都とその周辺では、^{さいっぽう}台東区、^{ふらの}新宿区、^{おたる}渋谷区、^{たいとう}千代田区、^{しんじよく}横浜市、^{よこはま}箱根町など。関西地

域では、京都市、奈良市、明日香村、大阪市の梅田地区や難波地区、神戸市。その他、福岡市、長崎市、那覇市、石垣市などすぐに挙げられる地域も多い。それらの自治体では、急増する観光客に対応できる観光産業の成熟が求められてきており、それを支える人材の育成が急務である。「観光」の学びは、観光客という他者の視点に立つことで、さまざまな仕事や産業の意味が明瞭になるという特性がある。ニーズとウォンツのちがいを見抜いてサービスを提供するのが、この産業の特色である。また、「観光」の学びを展開する際は、安易な「お国自慢」意識の醸成に陥らせないことに注意しなければならない。

6 児童の受け止め

最後に、第6時に児童全員に書いてもらった作文を3例紹介したい。

・「私はこの三日間の寺本先生の授業を受けてとても楽しく感じました。一日めは、道南観光プランを考えて短歌のような文章をつくりました。二日めは、寺本先生からいただいたパンフレット『函館旅時間』のよみとり、ホームページのえつらんをしました。私は、北海道に初めて来た時、何を持ってきたらいいか、くつは何をはけばいいのかとまどったけど、パンフレットやホームページを見て色々分かったので便利だと思いました。三日めは、客層に応じた観光の特色を学びました。絵はがきのような物も書きました。三日間まなんで、これから函館は観光客の人が観光しやすく、表示などにももっと他の国の言葉も入れた方がいい

いと思いました。函館を観光しやすい街に変えるには函館市民も努力しないといけないなあと思いました。」（5年女子）

・「わたしは、三日間で観光客の人の立場になって色々と考えました。動詞を組み合わせて文章を作ったり、パンフレットを見て函館にいても知らないことなども知ることができました。でも、わたしは客層に応じた観光を考えたのがすごく心に残りました。大人になってから、旅行するかわからないけど、だいたい歳のくらいの時は、どれくらいなど、考えられました。ネットワークの授業などでも色々な機能を見つけることができました。寺本先生の授業を受けて考える力が身についたと思います。」（5年女子）

・「この三日間、寺本先生が伝えたかったことは、これからの函館の未来は私達が支えていかなければならないということではないかと思います。一日め二日めは函館のパンフレットを見ましたが、自分が思っていたより函館の観光スポットはこんな所なんだ、日常の中であたり前などと思っていた事が観光客の人にとってはすごかったりと、おどろきました。もう一つは、考えたり作ったりする力です。最後のパンフレット作りは観光客へ伝える事が出来たと思います。函館はこれから観光客にやさしい町、喜ばれる町を目ざして一步一步すすんで行きたいです。」（5年男子）

出前授業をやってよかったと思える作文を得た。

参考文献

寺本 潔・澤 達大編著『観光教育への招待－社会科から地域人材育成まで』ミネルヴァ書房、2016年発行。

集団思考による社会科の資質・能力の育成

ー 単元「まち探検」における「比較する力・関連づける力」を例にー

横浜市立平沼小学校 加藤智敏 かとうともとし

1

はじめに

社会科は、一つの社会的事象をさまざまな視点から見ることによって、個性的な見方・考え方に広がり・深まりが生まれ、「社会的な見方・考え方」につながっていくものと考えている。このさまざまな視点を与えてくれるのが、子どもどうしによる集団思考である。事象について自分が見えていなかった部分を他の学習者とのやりとりの中で見ていくことができ、多面的な見方をもたらすことができる。集団で思考することの利点は、ここにあると言ってもよい。

本単元のように、「地域」という大きな教材を扱う際にも、集団思考は有効である。お互いの居住地域の様子を話すこと、観察や調査、地図づくりにも生かされるとともに、それぞれの生活経験のちがいや地域に対する見方・考え方のズレが観察・調査の目的の明確化につながったり、追究すべき学習問題を生み出したりすることにつながる。また、この見方・考え方のズレをもとにした学習を成立させることで、身に付けさせたい力でもある「比較」や「関連づけ」といった思考操作を、子どもたちに必要性のある形で、学習に取り入れていくことができる。ここでは、3年生の「まち探検」単元をもとに考えたい。

2

単元づくりに際して大切にしたいこと

小・中の7年間の社会科学習を見通し、その導入となる単元では次の点を大切にしたい。

(ア) 社会科学習の「学び方」を知る

～問題解決的な学習の理解～

- ・自分の目や耳で聞く、実際に体験するなど、事象との直接的なかかわりを大切にするこ
と。
- ・「問い」をもち、その「問い」について自
ら解決していこうとする主体性をもたせる
こと。

調べてきたことをもとに授業が展開され、集団で討議することを通して、新たな問いをもち、再度調べたり体験したりする活動を繰り返す中で問題解決を図る。こうした連続した学びのプロセスを子ども自身が理解し、学習を進めていけるようにする。そのためにも、子どもたちの行う諸活動に、必要感をもたせられるよう、学習の流れや資料の提示の仕方、発問や指示等を工夫し、7年間の社会科学習の礎となるようにしたい。

(イ) 育てたい資質・能力

～比較する力・関係づける力～

中学年における観察・調査の方法としては、次の視点を大切にしたい。

- ・ありのままに観察する。
- ・数や量に着目して調査する。
- ・観点にもとづいて観察、調査する。
- ・他の事象と対比しながら観察、調査する。
- ・まわりの諸条件と関係づけて観察、調査する。

(現行版「学習指導要領解説」より)

発達段階に合わせ、3年生では「比較する力・関係づける力」を中心に育んでいく。生活科で

は、事象と自分とのかかわりの中で生まれる気づきを大切にしながら、学習を進めてきた。社会科では、社会的事象をじっくり見つめることはもちろん、事象どうしの比較や、自分と他者の見方を比較・関係づけたりしながら、思考を広げたり深化させたりする。そのためにも、地域ごとの地形や土地利用の特色を比較したり、複数の視点から学習問題について考えたりするような場面を意図的・計画的に設定していく。

(ウ) 人から学ぶ

～社会参画へのはじめの一歩～

- ・地域社会の一員としての自覚をもつようにする。
- ・地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

社会的事象にかかわる人を取り上げ、学習することが大切である。人の営みや取り上げた人物の課題に寄り添って考えることで、社会的事象を自分事として考え、社会的な見方・考え方を広げたり深めたりしやすくなるからである。また、自分事として考えることで、社会参画への意識を高めることにつながる。本単元でも、人について着目する場面を設定し、自分も地域社会の一員であるという認識を育てる。また、人の営みから学ぶことの大切さを知ることができるようにする。

(エ) 地域性を考慮した教材と単元づくり

～子どもに身近な事象を取り上げる～

横浜市立白幡しらはた小学校の校区は、三方を小高い丘に囲まれており、学校は白楽はくらく駅とともに、まちの中でも低地に位置している。教科書にもあるように、「学校の屋上からまちをながめてみよう」と屋上に出ても、まちの景観を観察することは難しい。丘の中腹や頂上に位置する建築物を、やっと観察できる程度である。同じ市内でも、教科書と同様の活動は難しい地域が多いのではないだろうか。

一方では、市内各地に標高20m～50mほどの

丘陵地が広がっている。このような地形の特徴を身近なまちや市をとらえていく際の視点とし、単元を構成していくことを考えた。まちの高低を理解しながら、低地には商店や駅など人の集まる場所が多く見られ、高地には住宅などが多く見られることと関連づけていき、市全体と身近なまちとの共通点や相違点を確かめていく学習も可能であろう。また、^{かなざわ}金沢区や^{なか}中区、神奈川区などの海岸沿いには埋立地が存在していることも考えられるようにしたい。

また、現行版学習指導要領には、前述の目標分析にもあるように、地形的な特徴や土地利用について重きをおいているが、「人」の暮らしや営み、わたしたちの暮らしとのかかわりについては、自分たちが住む地域社会に愛着がもてるようにする、としか書かれていない。しかし、「地域社会」とは人がいて成り立つものであり、「人」とのかかわりについて学ぶことは以降の学習においても最も大切にしたいところである。本単元でもまちで暮らす「人」に焦点をあて、それらの人々の動きをもとに、市や他地域とのつながりを考えていけるようにしたい。

3

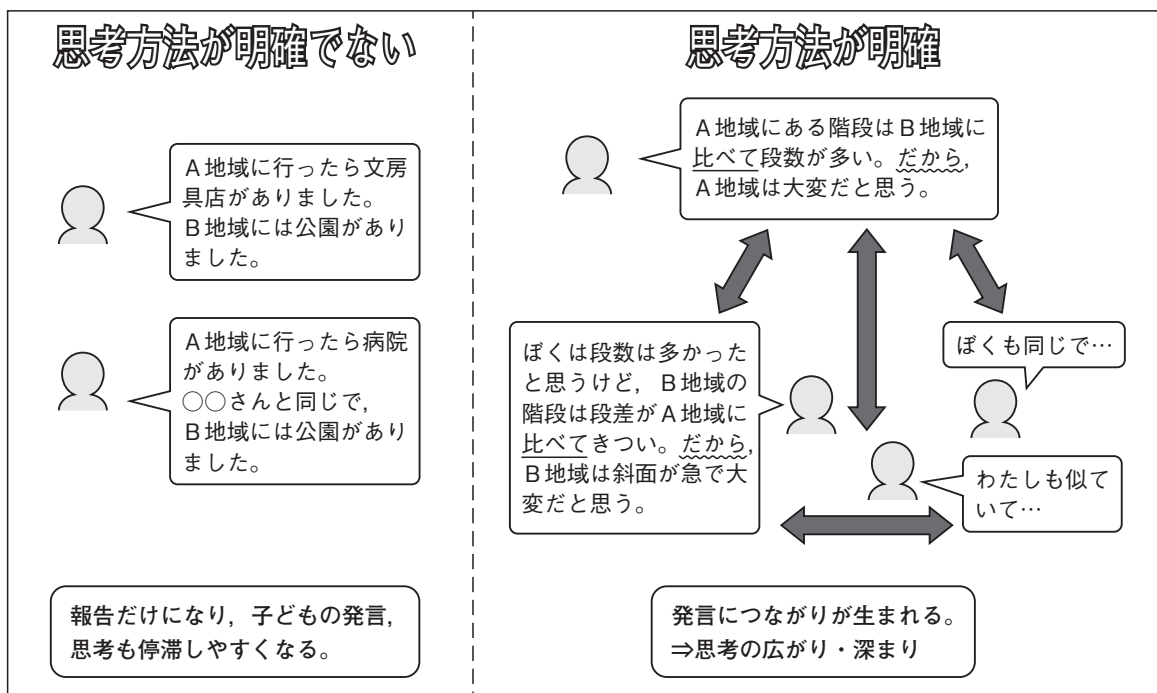
思考方法を明確にする

～「どのように」考えさせるのか～

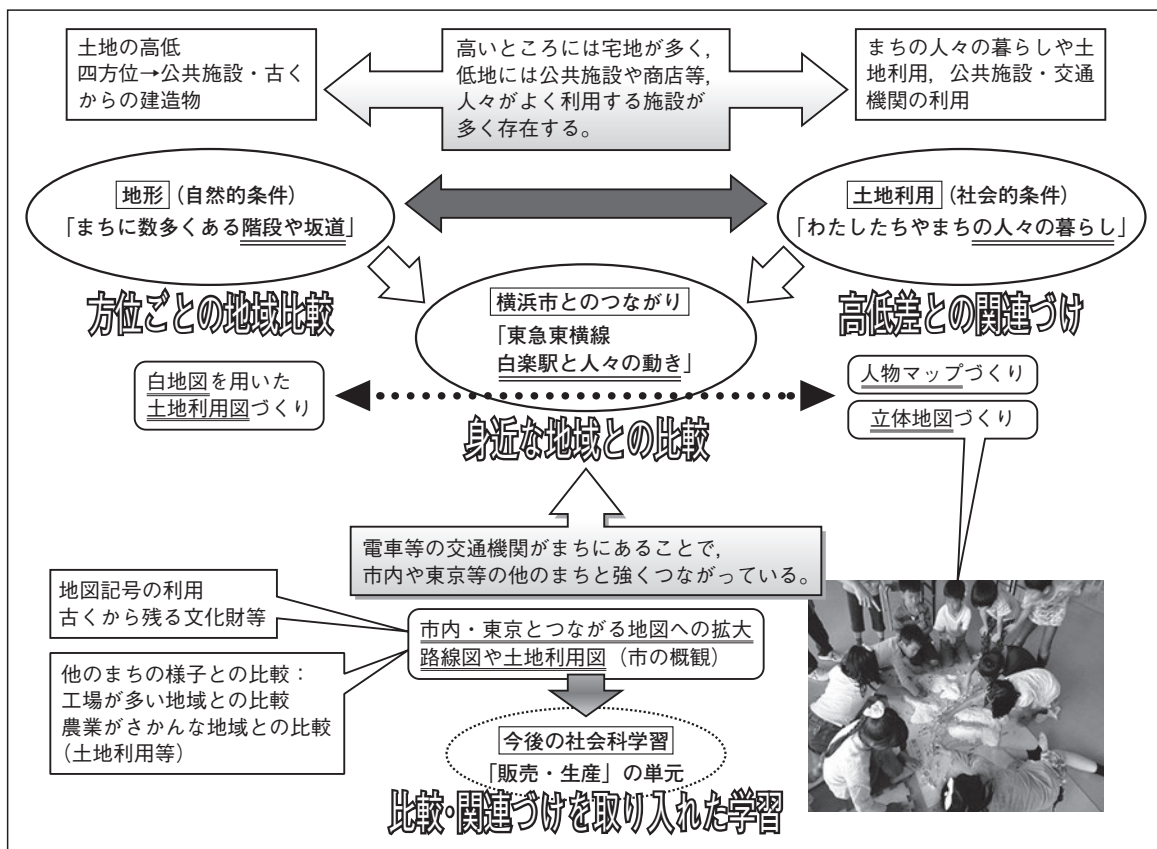
生活科ではまちを「点」として見ていくことに対し、社会科では「面」として見ていく。「まちの中にA文房具店がある」「近くに公園がある」というように、地域のことを知るうえでは必要であるが「点」のままであり、まちの特徴を自然条件や社会条件と結びつけて考えられないばかりか、身近なまちでしか活用できない知識だけが残ることとなる。

他の地域を見る際にも、身近な地域の学習で習得した見方・考え方が活用されなければならない。身近なまちの細部まで知ることではなく、地域をとらえるには「どのように」見るのかという、思考方法の獲得を目指していくということである。

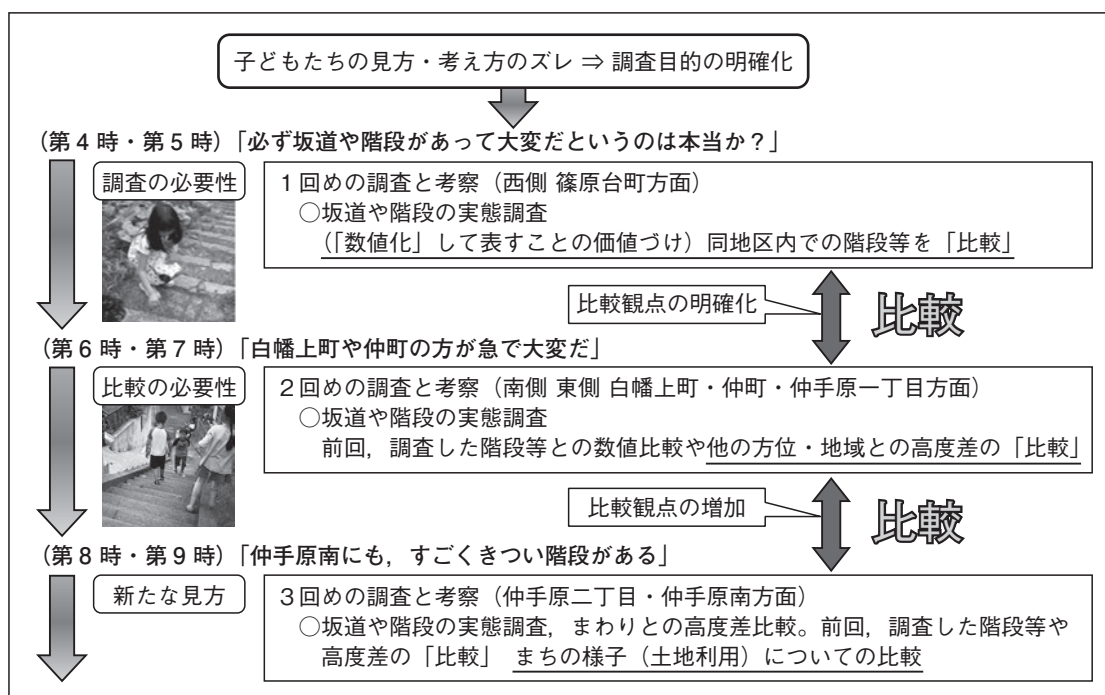
上述の学習指導要領解説に示された観察・調査



▲図1. 思考方法の明確化



▲図2. 単元構想図



▲図3. 観点の明確化

の方法には、身に付けるべき力や思考方法が示されているが、特に3年生では他教科において獲得すべき資質・能力との関係性や既習の経験等をふまえ、「比較・関連づけ」に重点を置いて指導していきたい。

また、「比較・関連づけ」といった思考方法を子どもが活用していくことは、「どちらが…」という問いや調査の目的等を生みだしやすく、集団思考を活性化させ、主体的な学習につながる。例えば、調査結果についての考察の場面でも、図1のようなちがいを生み出す。

思考方法が明確でない場合は、子どもの発言も報告だけとなって思考が拡散しがちになるとともに、教師が常に意見をまとめて子どもに返すなど、教師主導の学習になりやすく、子どもの主体的な学びにはつながりにくい。反対に思考方法が明確になると、活動が活性化するため、事象について自分が見えなかった部分が明らかになるとともに、問題が焦点化し、思考に広がりや深まりがもたらされる。

このように、集団での思考を活性化させるためには、子どもたち自身が、思考方法そのものを身に付けていく必要がある。その際に、次の（ア）（イ）（ウ）の3点を大切にしたい。

（ア）単元構想の段階で比較・関連づけを意識する ～教材の選定～

本実践では、「比較する・関連づける」といった思考方法の獲得を明確に意識して取り組んでいる。それぞれの地域を高低差で比較したり、人々の動きと交通機関・土地利用を関連づけて考えられるようにしたりするなど、単元を構想する段階で、それを考えられるように教材を選定した（図2）。

（イ）調査活動での比較

～観点の明確化・数や量への着目～

実際に外に出かけて調査するような活動の中でも、子どもたちに「比較」の思考方法を意識させながら取り組ませた（図3）。本単元では、「必ず坂道や階段があり歩くのが大変、というのは本当か？」という学習問題の解決に向けて、自分の考えの根拠となるように坂道や階段の数、階段の段

写真 A



写真 B



▲資料 A. 2 枚の写真の比較 着目点を時間帯や人の動きに定め、定点観測した画像資料を示す。

数、一段の高さなどを数値で示すことで、自分の見方・考え方に客観性をもたせようとしていた。先に（ア）でも述べた、坂道や階段を中心教材の一つとして取り上げた理由はここにある。いちばん段数が多い階段はどれか、いちばん段差がきついものはどれかといった具合に、比較する操作を無理なく活動に取り入れられる。

（ウ）思考操作場面の設定

グループや学級全体で、まち探検で見つけたことを発表するだけ、また、思ったことや感じたことを話し合うだけで終わってしまう授業をよく見かける。一時間の学習の中で、子どもが何についてどのように考えたのか、どんな力を身に付けたのか分かるようにしていかなければならない。

「比較」や「関連づけ」といった思考方法を子どもに身に付けさせていくためには、互いの見方・考え方を話し合う対話の中に、比較や関連づけにつながる、具体的な思考操作を取り入れることが大切となる。

そのためにも、単元全体の構想の段階や調査活動の際だけでなく、一時間の授業の中で思考操作場面（例えば画像や表、グラフなどの非連続型テキストを用いた比較）が必要となる。本実践の中でも、最寄り駅を利用する人々の様子について朝と夕方のちがいを示す 2 枚の写真を「比較」し

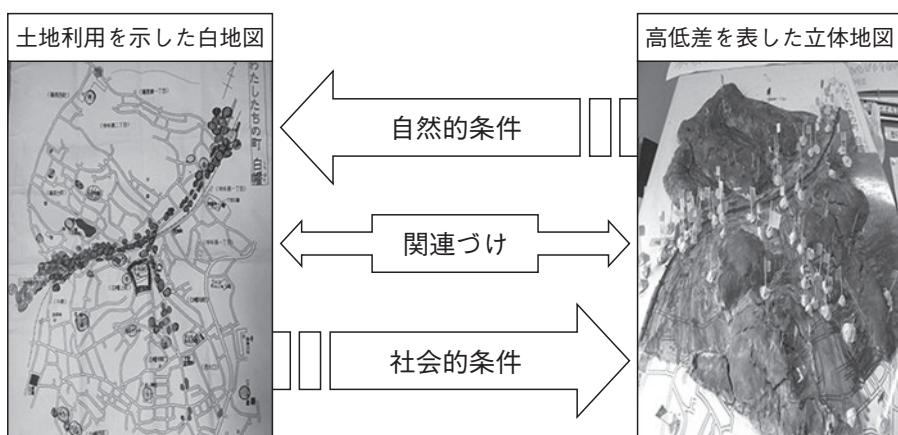
て、自分たちが暮らすまちと市とのつながりに気づかせたり（資料 A）、土地利用を示した地図と立体地図とを見比べ、土地利用と高低差を「関連づけ」て考えさせたりした（資料 B）。

4 おわりに

集団での思考場面を大切に、身に付けた思考方法を駆使しながら問題を解決していく中で、子どもの個性的な見方・考え方は、少しずつ社会的な見方・考え方に近づいていく。

「ぼくは資料を作ってきたんですけど…」、「まちの人に聞いてきたんですけど…」と、子どもたちが互いの見方・考え方のちがいを本気になって語り合う中で、一つ一つの「点」としてとらえていた事象どうしがつながりをもち始め、最後には「わたしたちのまち」という大きなとらえにつながる。まちは市につながり、市は県、国、そして世界とつながるものとして今後とらえていくことができるようになるだろう。

「みんなで考えて、分からないことがあったら、調べに行く」が社会科の合言葉である。はじめは、調査した資料を授業に持ち込むことや、自分の意見を述べることにとまどいを感じていた子どもたちも、学習が進むにつれ学び方を学び、調べたこ



▲資料B. 2枚の地図を用いた関連づけ それぞれの地図に色分け等を施すことで、土地の低いところには公共施設、高いところには住宅地が広がっていることがわかる。(※左写真は店舗にマークをつけている)

とを自分の考えの根拠として表出できるようになる。集団思考のプロセスを認識し始めた子どもたちは、いつも楽しそうだ。

5 新学習指導要領の方向性を受けて

本稿でも取り上げているように、調査目的や観点、思考方法を明確にし、子どもにとって必要感ある調査活動は、次期学習指導要領ではより大切となる。なぜなら、次期学習指導要領では、この本稿で扱った「まち探検」単元より「市区町村」単元に重点を置いたものとなり、「都道府県内における市の位置、市の地形や土地利用、交通の広がり」をとらえ、その特色について考えること、また、「市役所など主な公共施設の場所と働き」についても触れる内容となる。

よって、身近な地域の調査時間は自ずと少なくなり、従前のような学校のまわりの東西南北をめぐって絵地図を作成するといった活動の時間確保は難しくなる。3年生から始まる地図帳を活用した調査や、インターネット上で扱われるデジタル画像や地図などをもとにした観察・調査を取り入れていく必要性も出てくる。

市の特色や地域ごとのつながり、自然的条件や社会的条件の相互関連などを把握していくとき、

生活科の中に地図を活用した学習はなく、3年生の社会科で初めて地理的な見方・考え方を働かせることになる子どもたちの空間認知のあり方を踏まえると、やはり実際に歩いての観察・調査活動はなくてはならないものと考えられる。特に地図帳では実感が難しい土地の高低差や道路の交通量、また、3年生で大切にしたい人々との出会いなどは実地調査でしか味わえないものである。そのため、限られた時数を考えると、実感をともなう理解のためには、よりいっそうの工夫が必要とされる。いかに、地域の特徴をとらえるなかで養った「社会的な見方・考え方」を汎用的に活用し、市の特色を見出していくかが鍵となる。

3年生では市区町村を、4年生では都道府県を、5年生では日本の国土全体を概観するような学習が今後展開されることになるが、小・中・高における社会科学習を通して養われる「社会的な見方・考え方」は、はじめは個性的であった見方・考え方が学びを通して醸成されていくものと考えるとき、身近な地域の観察・調査で養われた見方・考え方が、市・県・国土の特色をとらえていく学びの中で汎用的に活用され、地理的な見方・考え方につながるようになっていきたいものである。

つなぎ・つながる学びをつくる

－「なぜ」から「つながる」学びを育てるために－

沖縄県糸満市立西崎小学校 西にし たつ お 竜王

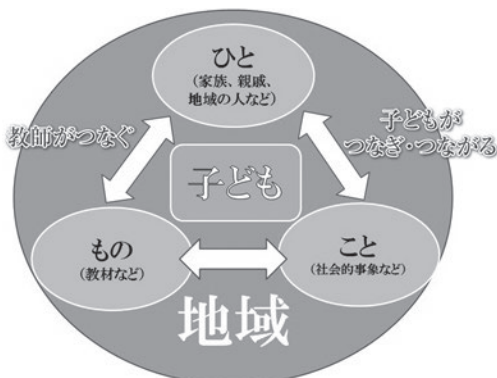
1

はじめに

本実践「農家の仕事」は、豊見城市立伊良波小学校において平成27年度に行われた。その前年度に沖縄県で行われた全国小学校社会科研究協議会研究大会では、地域素材の活用と『つなぎ・つながる学び』の関係を次のように述べている。

“社会科の目標は「公民的資質の基礎」を養うことであり、社会形成力や社会参画力の基盤づくりを目指すことである。そこで、社会科で育てて「自分の見方や考え方」を確かなものにしていくために、『つなぎ・つながる』学びの視点」を大切にしていきたい。そのために三の視点を重視する。一つめは仲間とつながり人とつながる学び、二つめは地域とつながり社会とつながる学び、三つめは自分とつながり未来とつながる学びの三つの学びの構築である。”（資料1、平成26年度全国小学校社会科研究協議会研究大会冊子より）

これに加え、さらに「なぜ?」「どうして?」と疑問が生まれるように地域素材を教材化し、調べていきたいという児童の意欲を引き出したい。



▲資料1. つなぎ・つながる学びのイメージ

そこから、家庭や地域の「ひと」や「もの」さらには「こと」などとも「つながる」学びを育てていけるのではないだろうか。そのように考えて、3年生社会科の実践を行ってきた。また、授業の中では、実生活での経験や体験をもとに自分が感じたことや考えたことをノートに書いて、思考を整理することを重視した。その発表を足がかりに資料の読み取りや対比、活用をすすめ、根拠にもとづいて思考を深め、表現する力を養いたい。

そうした表れを教師がとらえ、評価して全体へ広げて考え合わせ、他者のよさを認め、仲間とつながりながら学ぶ楽しさを実感させたい。そのためにも、児童の発言を全体で共有し、さまざまな意見や考えを比較・整理し、『つなぎ・つながる』学びを通して、身近な地域の社会的事象の見方・考え方を育てていきたい。

2

児童の実態

3年生に進級して初めて社会科を学ぶ児童たちが、自分たちの身近な生活と関連して学習をすすめ、興味・関心を高め、意欲的に活動して学びを深めるようにする。それにより、「社会科っておもしろい」「楽しい」「社会科が好きだ」と思えるようにしたい。そう意識して指導を行ってきた。

そのため本学級の児童は、社会科学習に意欲的に取り組む子が多い。しかし、さまざまなことに関心が高いため、学習していることを越えて自分の関心がある他のことについて発言してしまう児童も多数おり、授業からそれてしまうことがある。そのため、意欲的ではあっても自分本位の発言となりがちで、仲間の発言と関連づけて発言するこ

〈学習指導要領の目標〉

- (1) 地域の産業や消費生活の様子，人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし，地域社会の一員としての自覚をもつようにする。

〈学習指導要領の内容〉

- (2) 地域の人々の生産や販売について，次のことを見学したりして調べ，それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする。
 ア 地域には生産や販売に関する仕事があり，それらは自分たちの生活を支えていること。
 イ 地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特色及び国内の他地域などとのかわり。

〈育てたい子どもの姿〉

- ①地域の「ひと・もの・こと」について興味・関心を持ち，調べる子
 ②学習したことを生活に生かす子

〈単元の目標〉

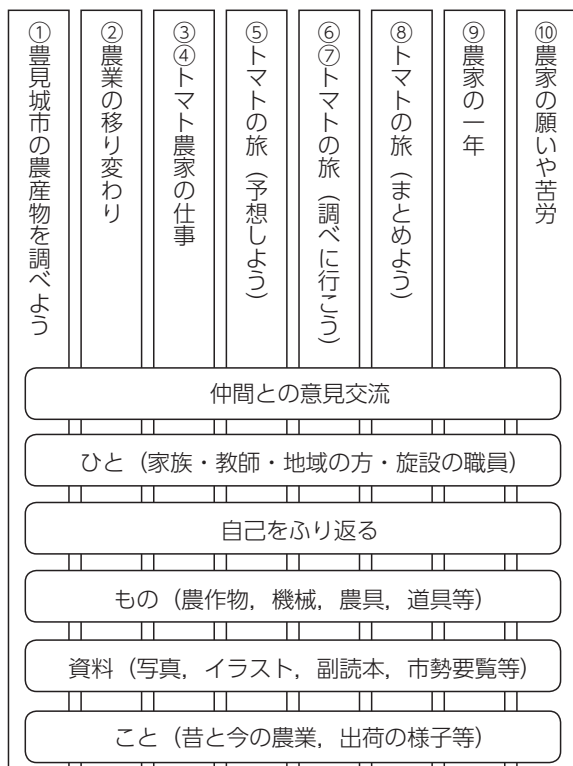
生産の工夫や努力，地域とのつながりなどについてとらえ，農家の仕事と自分たちの生活とのつながりについて考えさせる。

〈主な学習用語等〉

- ・農作物 ・葉野菜
- ・花き ・支柱
- ・自給自足 ・農薬
- ・志茂田原平野 ・苗
- ・アメリカ世 ・肥料
- ・ビニールハウス
- ・換金作物 ・マルチ
- ・拠点産地 ・害虫
- ・耕耘機 ・収穫
- ・集出荷場 ・検査
- ・品質 ・競り
- ・中央卸売市場
- ・箱(袋)詰め
- ・農事暦 ・露地栽培

(学習内容)

(つなぎ・つながる学び)



▲資料2. 単元の構想図

とが苦手である。よって、他者の発言をよく聴くことを重視することや、根拠をもって自分の考えを発言することができるように指導してきた。

それと同時に、提示資料（写真や図、資料など）の比較や読み取りなどから児童の疑問やつぶやきを多く出させ、それを教師がつなぎ、もう一度児童に戻して思考を深め合えるようにしている。さらに、学習したことや感想に自分の考えを加えた「ふり返し」を毎時間書かせて、それに教師が評価を加えながら、書く力や表現する力の育成にも取り組んでいる。

3 単元の指導計画

現行版学習指導要領の目標（1）には「地域の産業や消費生活の様子，人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし，地域社会の一員としての自覚をもつようにする」と述べられている。本実践の単元は，この学習指導要領の目標と内容を受けて構成された。前単元の「店で働く人と仕事」の学習では，販売の仕事に携わっている人々の工夫や努力についてとらえた。商品の品質や安全性，流通についても「自分たちの生活を支えている」という視点から自分たちの消費活動とかかわらせて考えてきた。

本単元では，地域の人々の生産活動について，身近な地域の生産や流通に関する仕事を見学する。また，その仕事に携わっている人々の話を聞いて調べたりする活動を通して，工夫や努力を考える学習とする（資料2）。

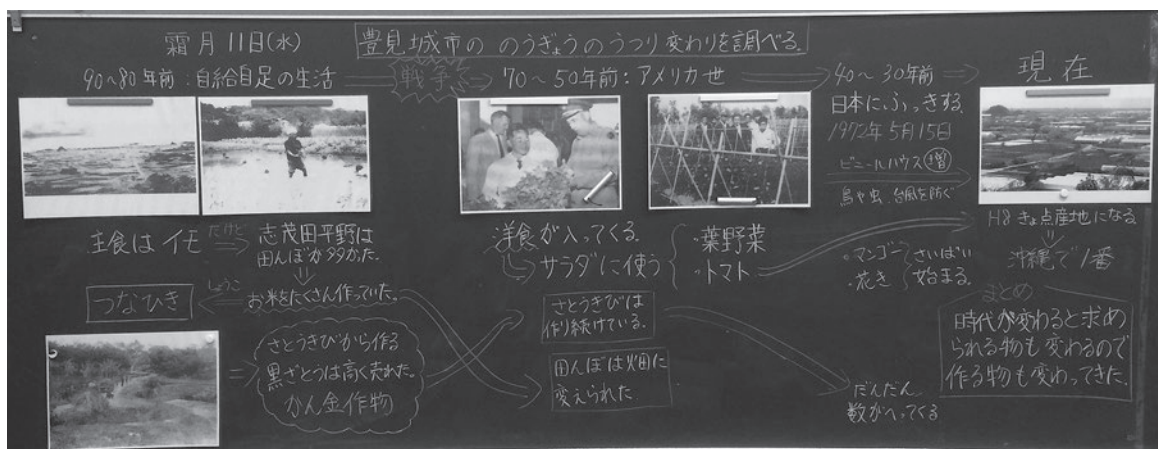
具体的には，豊見城市が県の産地指定を受けているトマトの生産農家を取り上げる。まず，資料の読み取りから気づいた現在と過去の市の様子について，さらに資料で確認できるようにする。さらに，農家の方々の話を聞いたり，集出荷場に見学に行ったりすることで，働いている人たちの様子や思いを具体的にとらえられるようにする。

また，夏野菜であるトマトをビニールハウスで栽培し，冬に国内各地へ出荷している理由を調べることで，沖縄の地理的要因を生かした農業のあり方に気づき，生産者の工夫や努力，他地域とのかわりについても考えさせていきたい。

4 指導の実際

第1時：課題をつかむ

ペアごとに市内の主な農産物地図を配布し，どのようなものがあるか互いに協力しながら読み取らせる。農産物を見つけたら発表させ，それぞれのペアの気づきを全体で確認しながら共有していく。市内ではさまざまな野菜のほか果物や花卉栽



▲写真1. 第2時の板書



農薬をまいて病気やがい虫をふせぐ



しゅうかくをする



ひりょうをまいて、土をたがやす



なえを植える



世話をする



ひりょうをまく

▲写真2. 農家の6つの仕事

培などが盛んなことにも気づいていく。その中で、2年生時に生活科で見学したバラ園やまち探検での学び、ふだんの通学路で見ている事実が想起され、自分たちが経験してきたことや潜在的に持っていた知識と資料とが近づいていく。

また、「いちばん多くつくられている農産物は何だろう」「市では昔から野菜がつくられていたのかな」などの、新たな疑問が児童の中から生まれる。そこから、児童とともに『市の農産物の今と昔のちがいや、農家の工夫や努力、苦労について調べる』との学習問題を設定していった。

この学習の中では、予想を挙げさせながら、なぜそう考えたのか理由まで答えさせていった。その理由もさまざまで、友達の考えに付け加えたり、関連させたりしながら思考がすすむ。先ほど述べたように自分たちの知識や経験へのこだわりもあったが、ある児童が資料を活用して発言できたことを賞賛すると、多くの子がその大切さに気づくことができた。

第2時：農業の移り変わり

ここでは、学習問題の一つである「市の農産物の今と昔のちがいは」について、資料で確認していっ



▲写真3. グループで仕事の順序を考え並べる

た。歴史上の写真や市勢要覧などの資料と児童の知識や経験、身近なできごと、既習内容をつなげることができないと理解度が下がるので、その点を意識しながら授業を行った。すると時代の移り変わりを通して、「県内で最も多くつくられるようになったトマトについて調べる」という見通しを立て、次時につなげることができた（写真1）。

第3・4時：トマト農家の仕事

トマトができるまでの仕事を6つに分け、どのような順序で仕事が行われているのか、並び替える作業をグループごとに取り入れた（写真2, 3）。

どのグループでも最初と最後の仕事はすぐに終わったが、それらの間の仕事については、児童たちの「なぜ？」という疑問から自然に対話が生まれ、互いの学びがつながってきた。次に全体で順序を確認していくと、グループ間の差異をめぐって意見交換が活発になり、クラス全体で児童相互の学習がつながっていった。冒頭に述べた「仲間とつながる」学びは、こうしてすすむのである。

その後、「トマトを育てるために、なぜこのような作業を行うのだろうか？」という疑問が生まれた。その理由を写真の読み取りからの気づきをもとに予想させ、全体での対話を通して練り合い、思考を深めていった。トマトを育てるための工夫についてまとめると、「収穫したトマトは、わたしたちの食卓に上る前にどこへ行くのだろう」という新たな問いが出され、次時へとつながっていった。

ここまでの授業の「ふり返し」では、「農家の人の工夫のおかげで自分たち消費者が安心して食べられる」ことに気づいたり、「トマトは嫌いだけど食べてみよう」という意欲が生まれたり、「2年生の生活科でのミニトマトを育てたときの失敗した経験」とつなげて記述する児童が現れた。さらには「トマトを自分で育ててみたい」という児童もあり、トマトという地域素材を仲間とつながって学ぶ中で、児童と地域のひと・もの・こととどうつながったことが確認できた。以下に「ふり返し」の作文例を紹介する。

今日のじゅぎょうまで、トマトを育てるための工夫がこんなにあったとは思いませんでした。けれども、今日のじゅぎょうで「トマトはこんなに大事に育てられているんだなあ」ということがわかりました。さらに、安心して食べれるように害虫や鳥に食べられたりされないようにする工夫もわかりました。ばくも2年のときにミニトマトを育てていて、十日間も水をやらないでぜんめつしてしまいました。いまばくは「あのとき、このじゅ

ぎょうをしていたらなあ」とこうかいしました。だから、トマトだけではなく、ほかの野菜を育てるときも一つ一つだいじに育てていきたいです。

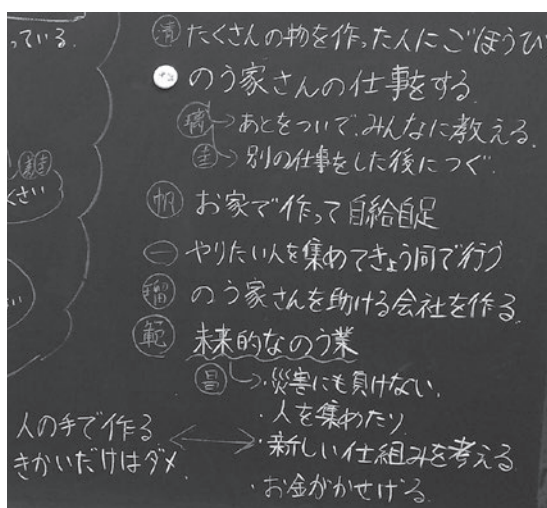
第5～8時：トマトの旅を調べる

前時で出された「収穫されたトマトがわたしたちの食卓に上る前にどこに行くのか」という問いについてあらためて予想させた。ある児童は前単元「店で働く人」の販売についての学習や実生活での体験から、「家族が購入するお店（スーパーや八百屋）ではないか」と発言した。前時の安全な食べ物を提供する農家の工夫に触れ、「その前に検査する場所があるはずだ」と発言する児童もいる。何を検査するのだろうという疑問に対して、病気や害虫などの安全面とする意見と、トマトの形・色・大きさなどの品質面とする意見とに分かれていった。

6・7時は校外学習を行い、収穫されたトマトが次に行く集出荷場の写真（^{すのこ}簀子の上に積まれた空き箱や箱詰めされた段ボールなどが読み取れる）から検証させていった。さらに、「どうやって値段が決まるの」という疑問が出ると、「テレビで魚の競りを見たことがある」との発言から競りを行う場所があることに気づき、そこからお店に並び自分たちの食卓に上るのではないかと考える。第8時には、見学を通して学んだことをまとめながら共通理解し、見学前の予想を検証した。こうした探究を通して、「収穫されたトマトは、旅をしながらさまざまな所をたどって自分たちまで届く」ことが理解され、『つなぎ・つながる』学びはさらにすすんだ。

第9時：農家の一年

ここでは、見学したことや学んだこと、自分で調べたことをもとに、「トマト農家が収穫を終えた後の期間はどのようにしているのか」という疑問に対し、農事暦を作成しながら考えていった。自分が予想したことを教科書や副読本などを活用して調べる中で、「ビニールハウスだけでなく、露地栽



▲写真4. 第10時の板書

培もしている」「トマトが夏野菜であり、国内各地と比べてつくる季節がちがう」という理解や、「なぜビニールハウスを利用しているのか」などの新たな疑問に気づき、そこから沖縄県の暖かい気候の特色を生かした農家の工夫に気づくことができた。

第10時：農家の願いや苦勞

見学したことを踏まえて農家の願いを挙げて、そのためにどのような工夫や努力をしているか理解できた。さらに農家の苦勞（困っていること）として、1980年と2010年の農家数を比べると約三分の一にまで減少している事実をとらえることができた。

そこから、農業で働く人は高齢者が多いことがイメージされ、「若い人が興味をもっていない」という考えになった。理由を考えさせると「めんどくさいから」「休みがないから」「お金をかせげないから」「誰かがやるのではないか」「古くさいから」「仕事が大変で家族との時間がとれないから」「育てた物が災害（台風など）でダメになってしまうから」との意見が出された。

一方では、「食べ物をつくる農家の方がいなくなると大変だ。このままでは問題だ」と感じ始めた児童も多い。そこで「このまま農家の人が減っ

ていくとしたら、あなたならどうしますか」と発問し、自分の意見を書いて発表させた（写真4）。

5

授業を終えて

本実践を通して、児童が今まで見ていた地域の見方が変わってきた。学校のまわりや何気ない登下校時の風景に、児童自らが新たな事実を発見し始めたのだ。「あそこの畑では葉野菜を育てている」「ネットがかけられているのは、虫から野菜を守るため」「学校に来るときにカラシナの畑を見つけたよ」「ビニールハウスの中でトマトがつくられていたよ」など、多くの児童の反応があった。

児童の食事に対する好き嫌いが減り、学校給食の残量もほとんどなくなった。ある家庭からは、今まで食べられなかったものも食べるようになったとの手紙が来た。地域の行事である綱引きも昔の稲作のなごりだとわかり、「なんとなく参加していたけど、次からは積極的に参加したい」との意見が出る。日記や「ふり返り」の中からも、「つながぎ・つながる学び」を通しての児童の確かな成長を見取ることができた。

子どもどうしの思考を練り上げる場面を考える

ー単元「新しい時代の幕あけ」を例にー

高知県高知市立小高坂小学校 いぐちゆきまさ 井口幸政

1

はじめに

社会科の研究授業と日々の授業とでは、その形態が異なっている。日々の授業では指導内容が多いことから、どうしても講義的な授業になりがちである。今回の研究では、「子どもどうしのかかわりの中から作り上げる授業づくり」をテーマとして、無理なく日々の授業に生かすことを目的に取り組んだ。子どもたちが自ら授業をつくり上げることで達成感や満足感をもち、集団としてのまとまりや、思考する力や対話する力を伸ばすことができる考えた。

2

教材について

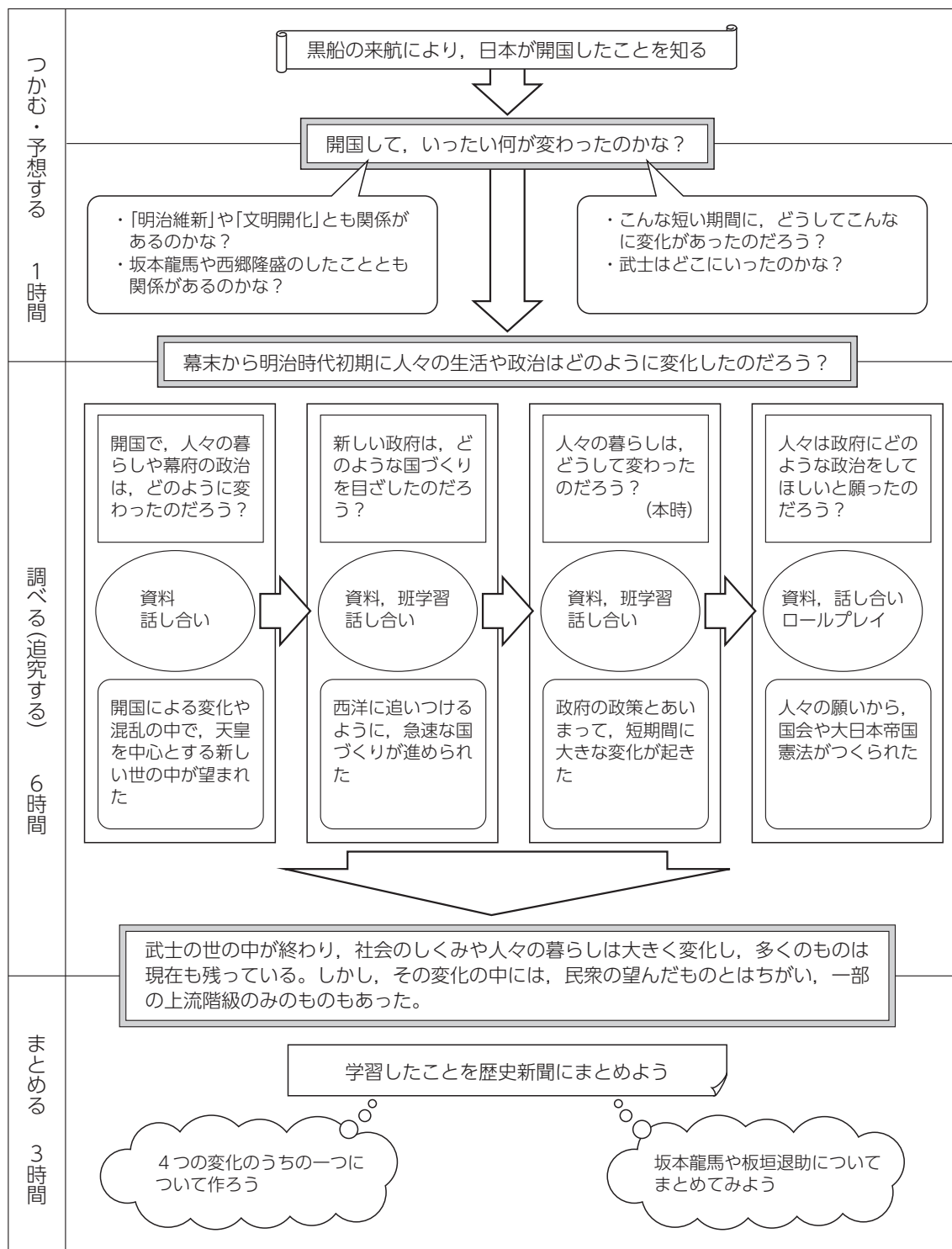
教科書では「新しい時代の幕あけ」単元である（教育出版『小学社会6上』p.88～105）。

幕末から明治時代前半は、短期間に中世的な封建社会から近代的な中央集権社会へと、社会のしくみや人々の暮らしが大きく変化した時代である。大日本帝国憲法の発布や国会の開設、新聞の創刊や太陽暦の採用、電話・鉄道の整備、税、郵便、教育など各種の制度の制定など、急速に近代国家へと国づくりを進めた。そのため、中には多くの人々の犠牲や社会の混乱も招いた。また、社会変化がもたらす恩恵の多くは上流階級の人々のものであり、下級士族や民衆にとっては以前と同じか、むしろ悪化した面も多い。これらの時代背景の中で、「黒船来航」「明治維新」「文明開化」のそれぞれの歴史的事象を通して、日本が政治や社会の新たなしくみを整え、欧米の文化を取り入れて、近代化を進めていったことを理解すること

がねらいである。

高知県は明治維新の前後に多くの人材を輩出した県であり、坂本龍馬や山内容堂、武市半平太や中岡慎太郎、板垣退助などの名前は、子どもたちも聞いたことがあるであろう。また、当時つくられた制度などの中で現在も継続しているものも多い。しかし、子どもたちは、歴史学習と現在の自分たちの生活に関連づけて考えることは少ない。本学級の子供たちは社会科に対して意欲的で活発に発言もできるが、例えば絵図史料からそのまま読み取れる表面的な発言が多く、社会科の視点としては深化の点で物足りない。

そこで本単元では、武士の世が終わり天皇を中心とする新しい世の中が始まったことを押さえつつ、当時の変革の中で定められた制度などを取り上げながら、それにかかわった人々の果たした役割と人々の思い、そして現在の自分たちの生活とのつながりを感じさせたい。その際、主に県内出身の人物（坂本龍馬、板垣退助、中江兆民など）と県内のできごと（高知自由新聞の「葬式」など）を取り上げ、少しでも身近に感じさせる。そのことによって、歴史学習と自分たちの生活に関連づけて考える視点をもたせられる。また、班での調べ学習や話し合いをさせることにより、個人やグループでの思考を深めさせ、それをクラス全体の場で発表することによって、さらに思考を深めさせたい。そのために単元構想図を作成し、単元全体を通した思考の流れのイメージとして図示する（図1）。それをもとに単元の指導計画を作成し、思考させる場面を意識的に取り入れた計画を立てた。



▲図1. 【「新しい時代の幕あけ」単元構想図】



▲写真1. ペアによる交流



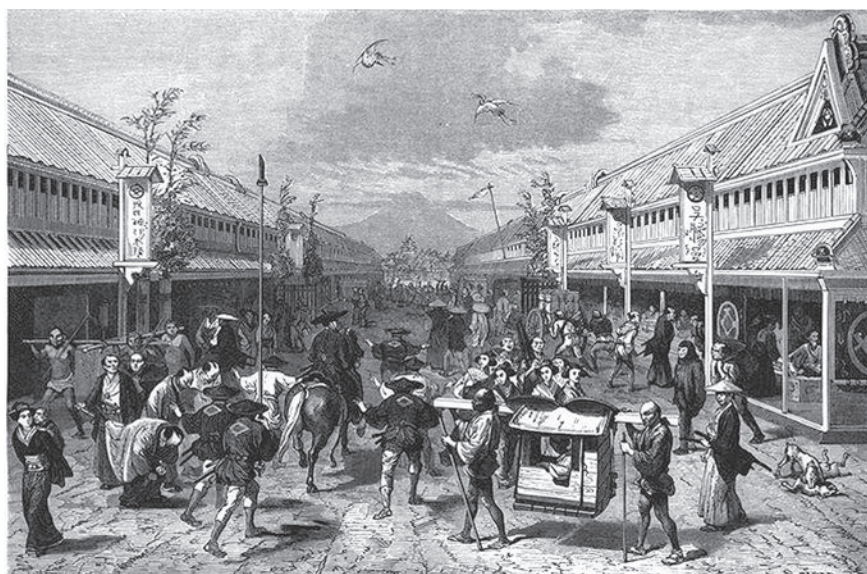
▲写真2. 班による交流

①形態の工夫と柔軟な取り組み

課題に対して、一人で思考する場面とペアや班などのグループで思考する場面とを、課題の内容や子どもの様子をもとに分けて設定した。場合によっては授業開始から班の形態で進めることあった。また、一人で思考を深めてから班で交流する場合と、短時間一人で思考し班で交流してから、再度一人に戻り思考を深めていく形態もとった。

②交流・話し合いを短時間でスムーズに進めるために

個人の思考を伝え合うために、ペアの場合、交流した後に必ず感想や気づいたことを相手に伝える決まりとした（写真1）。それにより、自分の考えが相手に届いているか否かを確認め、聞く側もふり返ることで理解を深めることができた。班での場合、自発的に進行役を担うように指導した（写真2）。進行役がいることで短時間での話し合



▲資料1. 江戸時代末期（1860年ごろ）の江戸・日本橋付近
（「三井呉服店」国際日本文化研究センター所蔵）

いがスムーズに進んだ。また、誰かが発した意見には必ず何らかの反応をさせることにより、単発的な発言ではなく、他者の意見や以前の自分の意見を踏まえた発言も少しずつ見られるようになった。

③子どもの思考を助ける資料の提示と課題の設定

a. 思考しやすい資料の提示

教科書掲載の資料をできるだけ使用するようにしていたが、資料どうしを比較する場合は、できる限り着目するポイントを絞れるような資料を吟味した。

下に示す資料1と資料2は、ほぼ同じ場所（現在の東京都中央区日本橋室町^{にほんばしむろまち}）と構図による様子が描かれている。いずれも遠景に富士山、その下に江戸城を望む。越後屋呉服店（資料1では右側の建物、資料2では左側の建物）や、人々の服装（和服と洋服）、乗り物（駕籠^{かご}と人力車・四輪馬車）などのちがいが読み取れる。このように場所や絵図の着目すべき点を特定することで、子どもの思

考範囲を限定させ、本来目を向けさせなかった「時代の変化」をとらえやすくすることができた。

b. 課題設定の工夫

課題の設定や発問によって、子どもの思考は大きく変わる。先の資料1・資料2を使用した授業では、「人々の暮らしは、どのように変わったのだろう。」という問いを設定した。しかし、これでは「変化の様子」に思考が向いてしまい、本時の目標である「変化の理由」に考えが思い至らない。そのため、問いを「人々の暮らしは、どうして変わったのだろう。」として、資料から探し出した変化の中から一つに絞る、または絞らせて、その点について思考させた。

4

考察

次ページに示す授業評価表の結果から、話し合いには概ね積極的に参加することができているが、交流・話し合いの中で、他者の考えに対して



▲資料2. 明治時代初期（1880年ごろ）の東京・日本橋付近

（「東京名所青島町三ツ井店両側富嶽眺望之図」都立中央図書館特別文庫室所蔵）

		はい ←────────────────────────────────→ いいえ							
		授業日 9/13	10/14	9/13	10/14	9/13	10/14	9/13	10/14
1	何を学習するかがはっきりわかった。	20	23	7	7	0	0	1	0
2	説明や例はわかりやすかった。	21	22	7	8	0	0	0	0
3	自分で考える場面があった。	16	25	10	5	0	0	1	0
4	班での話し合いに積極的に参加した。	23	20	3	4	2	2	0	4
5	友だちの意見や考え方がわかった。	21	21	6	5	1	2	0	2
6	〇〇がわかった（知識・理解）	26	23	2	6	0	0	0	1

の価値を感じ取ることができていない子どももいることがわかった(図2)。また、資料や課題によって、個人での思考のしやすさが大きく変わることで、個人思考の場面を意識的に設定しないと、交流・話し合いをしても思考が深まることはないこともわかった。交流・話し合いの形態がペアであろうと班であろうと、子どもたちの参加意欲は大きくは変わらなかった。

とがクラス全体での意見交流につながり、深まりのある意見が出てくるようになってきた。

②資料の提示や課題の設定

子どもの思考を助けるような資料提示とその読み取り方法を工夫することにより、思考する観点が明確となり、課題の解決と目標の達成に向かいやすくなった。

(2) 課題

①交流・話し合い

少人数での交流・話し合いは一定できるようになったが、その中で思考を深め合うことや全体の場で深めることは十分でなかった。他者の考えの価値を感じ取ることでお互いの思考を補い合えるように、ワークシート等の工夫や全体の場で伝わりやすい発表方法の工夫が必要である。

全体場で思考を深めていくためには、個人や少人数での交流・話し合いの中で思考を深めておくこと、全体場で発言しやすい環境づくりが必要となる。環境はある程度できていると考えられるが、やはり個人や少人数で思考を深め、自信を

5

成果と課題

(1) 成果

①交流・話し合いの場面づくり

各時の授業に交流・話し合いの時間を意識的に設定することで、ほとんどの子どもがそれらの活動に慣れ、意欲的に参加できている。その結果、しっかり思考された発言や、発言の回数も増えてきている。また、ペアでも班でもスムーズに話し合うことができるようになり、短時間での効果的な交流・話し合いができるようになった。そのこ

持って発言できるように指導していくことが必要である。

②資料と課題について

資料提示の方法やワークシートの作成には課題が残った。資料を見やすく提示したり、提示した資料に書き込んで確認できるようにしたりするために、ICTの活用など、教具の研究をさらに進める必要がある。その中でも、今後ますます導入されるであろうICT機器のよさを生かした、資料の見せ方や資料との出会わせ方の工夫、子どもと電子黒板の双方向のやり取りによる話し合い活動への形態のスムーズな移行も考えていきたい。

また、ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、特に視覚化と焦点化を図ることにより、単元全体や本時の課題をより明確したい。そうすることにより、クラス全体で課題を共有でき、足並みを揃えてから追究できるようにする。全員が同じ条件で授業に参加することで、学級集団の学習意欲がより高まるものと考えている。さらに、共有化の場면을効果的に位置づけることにより、意見の深化を図りたい。

本研究の中で、共有化について、形態のちがいより場面のちがいが鍵になることが判明した。積極的に交流させながら、その効果が見られる場面を探っていききたい。また、ワークシートの作成についても、子どもの思考の流れに沿い、またそれを補強できるものにする必要がある。

勤務校の近辺には、高知城、坂本龍馬生誕地、ち どうかん 致道館跡、えいふくじ 永福寺、女性参政権発祥の地など教材となり得る多くの素材がある。今後は、子どもたちにとって歴史を身近に感じられるような地域教材の開発と、それらを活用した学習ができるよう研究も進めていきたい。

(3) 次期学習指導要領を踏まえて

子どもが「主体的・対話的で深い学び」をするためには、子どもが学びたいような魅力的な素材、調べたいような疑問、ともに問題解決していける、信頼できる仲間が必要と考える。また、追究した結果を「広げる」段階では、論理的

な話し方や文章の書き方をするために、プログラミング的思考が必要となってくる。また、社会科で学んだことを、日常の身近な場面に結びつけることも求められているが、そのためには社会で起きている事象を「視る」力が必要である。素材も疑問もたくさんある中で、わたしたちに求められているのは、出会わせ方と追究の仕方、広げ方である。日常生活の中での会話やテレビのニュース番組、新聞記事なども活用しながら、社会的事象を身近なこととしてとらえさせること、社会的事象を論理的に「視る」ことが、すぐに取り組むべきことになっていくのではないだろうか。

こうしたことは、すでに社会科指導では日々実行されている。地域学習を通して市町村や都道府県、日本や世界などより広い社会をとらえることが、重要度を増してくるのではないだろうか。そして、その社会的事象を「視る」力が新たな疑問を発見させ、主体的な学びとなり、主体的に学ぶ集団の中から対話が生まれ、深い学びになるサイクルになっていくと考える。



第15回

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2017年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真 (またはイラスト) にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生 (数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2017年 7月1日 ~ 9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品



ピカピカのいのち

ぼくは、生まれてはじめて、せみがおとなになる
ところを見ました。今までせみのぬけがらは見たこ
とがあっただけ、こんなきれいなのが出てくるなん
てしりませんでした。白くてすきとおっていて、い
のちのほうせきみたいでした。そおとさわってみ
たら、ぶにゅとしていました。なんだかこわれそう
なので、ぼくは、どきどきしました。

小学社会通信 まなびと [2017年 春号] 2017年 3月31日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局
印刷: 大日本印刷株式会社

発行: 教育出版株式会社 代表者: 山崎富士雄

発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (内容について)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp> 03-3238-6901 (配送について)



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技
術の進展や国際化、情報化、高齢化などによっ
て、今、大きく変わろうとしています。このよ
うな社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆ
る命のびのびと生きていくためには、人や自
然を大切にしながら、共に生きていこうとする
優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」
というコンセプトワードに込め、社会のさまざ
まな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411